

ラヴ・ミー・モア
Love me more!

M i b a r u & J u n k i

麻生ミカリ

Mikari Aou



エタニティ文庫

目次

Love me more! 5

らぶみーもーもー! 319

Love me more !

1 ヒミツの結婚生活 〈美晴〉

——どうして、こうなったのかしら。

私は台所に立ち、黒こげになった白身魚の香味焼きを見つめていた。フライパンで焼く前は、我ながら良い出来になりそうだと、満足していたはずだった。なのに、結果はこれ？

「あああ、もう！ 失敗しちゃったものは仕方ないっ」

すでに時刻は二十一時を回っている。そろそろ純希が帰ってくるというのに、夕飯の支度すら終わっていない。いや、ある意味ではオワっているのだけれど！

いきなり情けないところをお見せしてスママセン。私、長嶺美晴。この春、大学を卒業し、お見合い相手の極悪御曹司——長嶺純希と結婚して早三ヶ月。会社では、旧姓の川嶋を名乗り、純希との結婚はヒミツのまま、愛情のかけらもないスタートだった。けれど、おたがいの気持ちを確認しあって、今ではとっても幸せな新婚家庭の若奥様……の、ハズなんだけど？

いかんせん、お料理が苦手なんですつ。もともと、家事なんてほとんどやったこともない状態で、降ってわいた結婚話。こうして、魚をまともに焼くことすらできない、みじめな日々。それでも旦那様は、文句ひとつ言わずに私の作るお料理を食べてくれる。だからこそ、申し訳ないって思うのよ。これが、いつものアクマっぷりで嫌味のひとつも言われたら、言い訳だってできるんだけどねっ。

「ただいま、美晴」

そのとき、背後から声があった。ああ、間に合わなかった、どうしよう。私は調理台に両手をつけて、肩を落とした。

「おかえりなさい」

その姿勢のまま、黒こげの白身魚を苦々しい気持ちで見下ろし、私は愛する旦那様の夕飯をどうすべきか考えていた。

「振り向いてもくれないとは、さすがに寂しいね」

「きゃっ」

急に後ろから抱きしめられて、耳元を純希の唇がかすめる。純希に初めて抱かれたのは、まだほんの数日前のこと。経験豊富な旦那様と違って、私はハジメテだったわけ。

「あ、あの、純希？」

「ん？ どうしたのかな」

「その……手は、何をしているのかしら」

エプロンの上から、私の胸元をやりわりとなぞる彼の右手を、そつとたしなめる。けれど、アクマの旦那様がその程度で諦めてくれるわけがなかった。

「今夜の夕飯は、美晴がおかずなのかと思って。違うの？」

私をおかずに白いご飯が食べられるなら、やってみなさいよつ。そう言いたい気持ちを、ぐつとこらえる。彼の目にも、フライパンの中、白身魚の成れの果てが見えているのはわかっているからだ。

「それとも俺のかわいい奥様は、一日働いてきた夫に、お預けを食らわせるつもり？」

「そ、そんなに、毎日するコトじゃないよね！」

「美晴、どんないやらしいことを想像したの？ 俺は夕飯の話をしているんだけど、ね」

絶対、嘘だつ。わかっているのに逆らえない。私は頬が熱くなるのを感じながら、小さく首を横に振った。

「抵抗しないと、このままおいしくいただいちゃうけど、いい？」

「だ、駄目！」

「じゃあ、デリバリーを注文して、お風呂でも入ろうか」

彼の手が離れて、私は自由を取り戻す。デリバリー、かあ。今日だって定時で帰宅し

ているのに、夕飯すら準備できない私に対して、純希は不満を感じたりしないのかな。

「どうしたの？ もつとしてほしかった？」

「ち、違うっ」

「ピザ注文しておくから、お風呂の準備してきてくれるかな」

「……うん」

ネクタイを緩め、ピザ屋のチラシを手に電話をかける旦那様を横目に、私はバスルームへ向かった。

純希は、私の働いている長嶺総合商事株式会社の社長令息。いわゆる御曹司おんそうし、というやつ。もともと、パパのコネで就職が内定していた私は、こちらからお見合いを断ることもできないまま、純希と結婚した。なぜ純希が私を選んだかは不明。ふたりきりで庭園を歩いていたときに、ものすごく感じの悪い発言をした私に向かって、彼は美しい微笑ほほえみを浮かべたんだ。

『恋愛を前提に結婚するにしました。よろしく』

今、思い出しても、絶対に普通じゃない。きっと御曹司っていうのは、頭のネジがちょっとゆるんでいるんだと思うの！

「美晴、準備できた？」

「え？」

洗面所で、過去の出来事に思いを馳せていた私は、彼の突然の問いかけに、目を丸くした。準備って……

「仕方ないな。脱がせてほしいってことだよね？」

「や、待って、純希っ、自分で脱ぐから！」

エプロンはずさされ、ワンピースの背中のファスナーがおろされる。私は、慌てて彼の手が届かないところへ逃げようとするけれど、バスルームに逃げ込んだのは間違いだっただけ！

「あれ、今日はそういうプレイがお好みかな？」

「ぶ、プレイって、何を……」

「俺を誘うのが上手な奥様で、本当に参るよ」

半袖のワンピースが、肩から落ちかける。私はそれを手で押さえ、目の前に迫る純希を懇願の瞳で見上げた。

「純希、ほら、ビザも届くんだし、早くお風呂すませないと！」

「そうだね。美晴がいい子にしていれば、きっとすぐ終わるよ」

「それって、どういう意味!？」

これ以上、逃げ場のないバスルーム。私は両手でワンピースを押さえたまま、立ちす

くむ。純希が手早くバスタブのふたを開け、ワイシャツを脱いだ。細身なのに、筋肉質。その体が美しいのは、もう知っている。

「美晴?」

「洗面所で脱ぐから!」

「だーめ。逃がさないよ」

彼の横をすりぬけようとして、私は純希の腕につかまってしまう。背中にまわされた純希の手が、ワンピースの中に入り込む。そして、突然の解放感。

「やっ、駄目だっば!」

ブラジャーのホックがはずされて、首筋に唇が触れた。私は彼のキスで、体中に電気が走るのを感じる。

「駄目じゃない。美晴は俺の、かわいい奥様だから、ね」

「だから、毎晩こんなこと、んんっ……」

反論しようとした唇がふさがれる。甘く舌が絡み合い、私は純希の肩につかまるように手を置いた。

抵抗なんて、本当は最初から無駄だって、頭のどこかでわかっているの。だって私は、いつの間にか心も体もあなたのモノになってしまったのだから。いったい、どうしてこんなに好きになってしまったのかしら。

「……ん、っ」

「よくできました。じゃあ、お風呂入ろうか」

唇が離れるころには、下着まで脱がされていた。私は慌ててバスタブの中へ。そんな私を見て、純希は楽しそうに笑うと、洗面所で衣服を脱ぎ捨てた。

我が家のバスタブは広い。

だけど、どんなにバスタブが広くても、ふたりで入ると互いの体は触れ合うことになる。

「純希、あの……」

「ん？」

彼は、和風美青年としか言いようのない、クセのない美しい顔立ちに、やわらかな笑みを浮かべて私を見つめる。背後から、ぎゅっと裸の体を抱きしめたままで。

「お風呂はね、いちゃいちゃするためのものじゃなくて、一日の疲れを癒す場所だと思
うの！」

「俺は今、一日の疲れを癒しているつもりだけど？ 美晴は、こうやってくつついてい
るだけで、そんなにイヤラシイ気分になっちゃうのかな」

「そ、そういうことじゃなくて！」

「それとも、してほしいって催促？」

私を抱きしめていた純希の腕が、少し隙間を作る。そして間髪をいれずに、両胸が彼

の手のひらに収まった。

「ねえ、教えてよ。美晴はどうされたいの？」

「私はゆっくり、お風呂に入りたい……っ」

「ゆっくり？ こういうことかな」

「やっ、ち、違うっ」

言葉のとおり、ゆっくりと私の胸を両手で揉む彼に、せめてもの抵抗を試みる。ただ
どそれは、恥ずかしいからだ。純希に触られるのが、嫌なわけじゃない。

「……んっ」

「ほら、美晴。こっち向いて。キスしてくれないの？」

少し甘えるような彼の声に、私は逆らえない。裸の体を反転させて、胸と胸を密着さ
せた状態で、唇を合わせる。

「美晴も、俺を欲しいって思ってくれてるのかな？ そんなに素直にキスしてくれると、
今夜は眠らせてあげられないかもしれない、ね」

「そ、ういうことじゃなくてっ」

純希の足が、お湯の中で私の両足の間に差し込まれる。彼を跨ぐような姿勢をとらさ
れて、もう目を開けられない。こんな格好、とてもじゃないけれど、恥ずかしすぎる。

「あ、や、やだっ」

足の付け根を、純希の指が撫でる。それが何を意味するのか気づいて、私は体を離そうとした。

「だって、美晴が痛い困るから、今のうちにほぐしておかないと」

「今のうちって、んん、んっ」

「ピザが届いちやうから、お楽しみはあとで。今は指だけ、ね」

「あ、あっ」

入り口付近を執拗になぞられていると、下腹部がじわりと熱くなってくる。彼が触れた箇所が、溶けていくような感覚。

「や、純希、だめえ……っ」

「かわいいよ、美晴。もつと聞かせて」

「んん、あ、あッ」

今にも達してしまいそうだと思った瞬間、純希は私のわきの下に両手を入れて、抱き上げた。必然的に、快楽を覚えた箇所は物足りなさを訴える。

「……え？」

「さて、それじゃ体を洗って、あがろうか。ピザが届くまで、あと少しだよ」

「あ、あの、純希……？」

「イカせてもらえると思った？」

世にふたつとないような、美しさ。純希が、にっこりと微笑んだ。

「だって美晴が言ったんだよ。お風呂は一日の疲れを癒すための場所だって。俺は美晴の、切ない表情を見て満足だから、続きは夕飯のあとで、ね。それまでずっと、俺を欲しがってほしいよ」

誰よりも優しく、誰よりも意地悪で——そして誰よりも大好きな、私の旦那様。彼は、天使のように美しい笑顔のアクマなんですっ。

2 愛しの君が望むのは 〈純希〉

美晴は、かわいい。

それは外見の話ではなくて、心の問題だろうと俺は思っている。だからといって、顔がかわいくないという意味ではない。本人はあまりわかっていないようだが、顔立ちだっけ十分かわいいのだ。

「美晴、おいで」

ベッドに横たわり、手を差し出す。彼女は少しうつぶいで、俺の手に自分の白い手をおせた。小さな手。細くて折れそうな、彼女の体。俺は、彼女を抱きしめる。やわらか

なベッドの上、腕の中で美晴が甘い吐息を漏らした。

「好きだよ」

額にキスすると、彼女は上目遣いに俺を見上げた。結婚当初は抵抗する彼女をいかにして屈服させるかばかり考えていた。それは、ただのゲームでしかなかったはずなのに、いつしか彼女は俺にとってなくてはならない人になっていた。いつから——いや、最初から俺は彼女に惹かれていたのかもしれない。だからこそ、彼女との結婚を望んだ？

「私も、好き」

小さな声で囁いた彼女の唇を、俺の唇で封じる。同じものを食べて、同じベッドで眠って、毎日を共に過ごしていれば、俺たちの体の中身は同じになるだろうか？ そんなことを思うなんて、美晴に出会う前の俺からすれば、ありえなかった。

そう、彼女に会う前の俺は、一言でいえば非常に傲慢だった。美晴はきつと『今だって十分傲慢だよ！』と反論するかもしれないね。けれど、君に出会って俺の人生は、完全に色を変えた。

九年間、俺は何度も自分の心のかさぶたをはがして、まだ血が出ることを確認する日々を繰り返していた。過去の傷が消えてしまうことを、恐れていたのかもしれない。美晴はその傷口を、消毒して癒す方法を教えてくれた。痛みから逃げるふりをして、本当はその痛みがすがついていた、俺のみじめな過去を許してくれた。それができたのは、彼女

だけだった。

「ん……っ」

バスルームで触れられてから、ずっとこらえていたのだろうか。彼女は今にも泣き出しそうな声を上げる。

「どうしたの、美晴」

だけど、わかっているも君に言わせたい。そのぐらいはいいでしょう。これは意地悪じゃない。俺は君を愛してるんだ。

「もお、純希なんか、純希なんか……っ」

涙をためた大きな目。ふちが少し赤くなった目尻にキスすると、俺はかわいい奥様のベビードールの中へ、手を差し入れる。わかっているよ。君が、俺を欲しがってくれていることは——

「あッ、や、んん」

「何が嫌なのかな？」

唇を噛んで、美晴が目を閉じた。きゅっと胸の先をつまむと、こらえきれない声から漏れる。ああ、そんなかわいい声で俺を誘ったら、どうなるかわかっているのかな。まだ慣れていないだろう、彼女の体。強引に抱くよりも、美晴が俺を欲しがる姿を見る

のが、たまらなく幸せだった。

「どうしてほしいか、言ってくれないのかな」

「だ、って、そんな」

「こんなに感じてるのに、強情な奥様だね」

ベビードールをまくり、あらわになった胸の先端を舌でつつく。美晴は首を振って、シーツをぎゅつとつかんだ。白い指の関節に、血管が浮かんでいる。俺はそれを横目に、彼女の胸の頂を口に含む。唇で食んで、軽く吸うと、美晴の体が震えた。

「や、お願い、純希、意地悪しないでえ」

「意地悪？俺は優しくしてるつもりんだけど、ね」

「違う、違うの。お願い……」

細い腕が、俺の首にしがみついた。君が欲しいのは、俺？それとも俺の愛情？ね

え、それとも……？

「愛して、ください」

今はそれが精一杯だろうね。数日前まで経験すらなかった彼女が、直接的な言葉でねだるなんてできないのはわかつている。俺は彼女の髪をくしゃりと撫でた。

「たっぷり、愛させていただきます」

冗談めかして言ったけれど、本当は俺だってこれ以上我慢なんてできない。いつだっ

て、美晴の前では余裕のあるふりをしている。好きな女の前で、情けない姿なんて見せたくないからね。

「ん、んっ」

腰の左右に結ばれた細いリボンを解く。下着を奪うと、彼女は目を伏せたままで切なく甘い声をこぼした。

すでに彼女からあふれた蜜で、その周辺は潤っている。こんなに欲しがってくれたのだと思うだけで、今すぐに無理やり彼女を押し開いてしまいたくなる。

「美晴、愛してるよ」

狭い内部を、指で静かにこする。あまり急ぐと、彼女はまた痛みを感じることを知っていた。——俺しか、知らない美晴。すべてを、俺が教えてあげるよ。君の体のどこが感じやすくて、どこがいいのか。

「じゅん、き」

「そんなかわいい声出すと、今すぐ奪いたくなる。ねえ、俺を愛してる？」

「愛して、る。純希、大好き」

「まったく。美晴には、俺の我慢が理解できてないね？」

ぎゅうつとしがみついてくる彼女の、ひどく敏感な部分。俺は濡れた指をずるりと引き抜いた。そして美晴にも見えるよう、目の前でその指を舐める。

「……やつ、待って、それはよくないと思う！」
慌てて俺の手をつかむ彼女は、恥ずかしさで頬を真っ赤にしていた。わかっていてや
ってるんだよ。ねえ、美晴の反応が愛しすぎて、我慢できそうにない。もう、君のこと
しか考えられないんだ。

「好きだよ。俺を、受け入れて」

「ん……っ」

互いの粘膜がこすれあう。入り口を押し開いて、彼女の内部に包まれた俺は、今にも
暴走しそうな自分と戦っている。

「あ、あッ、純希い」

泣き出す直前みたいな、くるおしい声で美晴が俺の名を呼ぶ。狭い彼女の内部、俺は
意識を集中して、静かにその奥に突き進んでいく。

「美晴、痛い？」

「わかんない、い、……んん、んっ」

最奥に到達した俺は、大きく息を吐いた。奥様にはわからないかもしれないませんが、男
だつて結構大変なんですよ。いつ飛ぶか自信のない理性を、必死で引き止めているわけ
だ。君を傷つけないように、怖がらせないように、ね。

「……好きって、言つて」

そんな目で俺を見るのは、逆効果だつてわかつてる？ このまま思い切り腰を打ち付
けたい衝動——これ以上煽らないでもらいたいね。

「大好きだ」

自分の声と思えないほど、掠れた声だった。情動に操られまいとキリキリに張り詰め
た糸を、切らないようにセーブしているんだ。

「ん、ダメえ」

「何が、駄目？ 美晴が望んだんでしょ？ 好きだよ。誰よりも君が好き」

囁くたびに、彼女の内部が切なく収縮する。俺の『好き』って言葉に、感じてしまう
んだね。ああ、もうおかしくなりそうだ。めちゃくちゃにしたくなるよ。君の意識が飛
ぶほどに、その愛しい体を食べるか。そして、ふたりが溶け合うほどに温度を同じくして、
君の奥に愛情をときはなつ。身もだえするほどの愛情で、美晴のすべてをふさいであげ
る。くるおしい妄想で、俺の心は理性を叩き潰した。

「あっ……、ああ、んっ」

「愛して、る」

強く、深く、彼女を扶く。窮屈な内壁をこすりあげると、美晴は俺の肩に爪を立てた。
「……っは、ああ、美晴、好きだよ」

「ダメ、そんな、そんなにしたら、んん、ん、あッ」

駄目だなんて、言わせない。俺はその赤い唇をふさいで、彼女のあえぎ声さえも奪いつくす。誰にも聞かせない。俺の中に閉じ込めてしまえたらいいのに。情火に焼かれて、俺は狂ったように彼女の内側を穿つ。腰を揺らし、快楽から逃れようとすることさえ、許さない。細い腰をつかんで、振動のひとつも拒めないよう、すべての情愛で貫く。

「ん、……ん、んんッ」

くぐもった甘美な声が、耳をくすぐる。つながったまま、内部だけで彼女が達したことは、まだない。今夜こそ、と思っていたはずなのに、またしても俺は焦りすぎたのだろうか。いや、違う。いつもよりもきつく痙攣する彼女の内壁が、俺にそのときが近いことを訴えている。このまま、そう、あと少し——

「ん、やッ、ああ、あッ」

唇を離すと、美晴の唇からは、悦楽の悲鳴がとめどなくこぼれた。

「や、純希、……は、っんん」

「我慢しないで。俺も、もう限界、だから」

「あッ、んん、あ、あッ、んん——」

「……っく」

彼女の奥深くに、俺は愛のすべてを注ぎ込む。まぶたの裏に光る、あの輝きが心の果てまでも続いていく、——その瞬間に。

美晴は俺の腕の中で、目を閉じている。ねえ、美晴は初めてつながったままで、快楽の果てに追いやられてしまったことが恥ずかしい？ 俺は、嬉しくてたまらないけど、ね。

「そうだ、美晴。聞こうと思っていたんだけど」

「なあに？」

彼女が目を開けて、俺を見上げた。まだ快楽の余韻が残ったその瞳に、俺は心が震えそうになる。感じてくれてありがとう、なんて言ったらきつと、君は怒るんだろうね。

「何か、欲しいものはない？」

「どうしたの、突然」

「さあ？」

あと一ヶ月ほどで、美晴の二十三回目の誕生日だということを、本人は忘れているのだろうか。

「欲しいもの、は」

美晴は、すべらかな額を俺の肩につけた。

「友達……かな」

「それは、どこに売ってるんだろうね」

返事はない。わかっていたけれど、彼女は俺との生活を秘密にするために、今までの

友達と連絡を取るのもやめていた。真実をごまかして付き合うことはできないから、と彼女らしい正直さのせいで。

「……おやすみ」

静かな寝息が聞こえてくる。規則的な、その呼吸を聞きながら、俺も目を閉じた。

3 六月の風 〈美晴〉

とりあえず平和な毎日を過ごす私は、ある程度満たされていると言って差し支えないのだけれど、欲しいものがひとつだけあった。それは、純希が私に買い与えることができないもの——友達。大学までの友達とは連絡をとっていなかったし、入社してからは秘書課のお姉さま方と相容れず、ちよっぴり孤独を感じていた。もちろん純希といると幸せだし、それだけでは満たされない自分をよくばりだと思う。

「美晴、いつてくるよ」

純希が洗面所で化粧をしている私に声をかける。大体的場合、純希が先に出社する。少しでも早く帰宅するために、以前より早い時間に出社していることは知っていた。

「いつてらっしゃい。今日の帰りは？」

「いつもどおりだと思っけど。美晴はどうなのかな」

「えっと、今日から秘書課に異動してくる人がいて、歓迎会をやるって聞いているから、ちよっと遅いかもしれない」

「へえ、この時期に異動とは珍しいね。歓迎会は秘書課だけでやるの？」

「企画制作部にも異動してくる人がいるから、合同で、幹事も向こうの人にやってもらえるの。私はただ参加するだけだよ」

私が答えると、純希は一瞬何かを考えるような表情をした。何かあるのかな。企画制作部と秘書課の歓迎会に、何かあるわけでもないけれど。

「帰りは、遅くなったらタクシーを使って。でもあんまり遅くならないでくれると嬉しいかな。俺のかわいい奥様」

ちゅつと音を立ててキスすると、純希は玄関へ向かう。ううう、朝から甘すぎるんだから！ 飲み会は今までも何度か参加しているのに、何が心配なんだろう。

「って、時間やばい！」

私は急いでアイラインをひいて、口紅を塗る。

純希は、私に甘い。意地悪だったり、恥ずかしいことを言ったりするけれど、それも

私をからかって遊びたいという彼なりの愛情だと思う。本質的に優しいし、面倒見もいい。結婚していることを公表しようとも、言ってくれていたのだ。だけど、仕事がある程度できるようになって、後ろに純希の姿を重ねられなくても『川嶋美晴』としてまっすぐ立てるようになるまで、公表は控えてもらうことにした。これからの人生を一緒に生きていくうえで、純希のお荷物でしかないなんて嫌だ。何より私自身が仕事にやりがいを感じている。学生時代にアルバイトをしたこともなかったもので、仕事を始めて学んだことがたくさんある。知らずにいたかった、秘書課のお姉さまたちの陰口のすごさ、なんでものも知ってしまったけどね。

「川嶋さん、全然飲んでないじゃないの。もっと豪快にお飲みなさい！」

お酒が入ると女王様っぷりに拍車がかかる能城さんが、私の隣に座ってお叱りの言葉をお聞きする。別に飲めないわけではないけれど、あまり遅くなると純希が心配するし――

秘書課に新しく配属されてきたのは、林原秋乃さんという私より三歳上の女性だった。林原さんは本来ならば今年の四月から、秘書課に異動する予定だったらしい。以前は海外対策事業部で、大きなプロジェクトのアシスタントをしていた、と聞いた。海外対策事業部なんて、本社のエリートさんたちの集まる部署！ 私からすれば、雲の上の人だ。そのプロジェクトの関係で、異動が遅れていたんだって。

「はい、いただきます」

私にはっこり微笑んで、能城さんの視線を感じながら、グラスを空ける。

「いい飲みっぷりじゃないの。いつも気取って生意気な川嶋さんとは思えないわあ」
「私、気取ってなんかありませんよ」

「長嶺部長の寵愛を一身に受けているからって、調子に乗ると痛い目を見るわよっ」

この人、酔っている時のほうがかわいいのよね。ゴージャスな巻き髪に、大きな金のピアス。能城さんは本当に華やかだ。彼女が秘書としてのスタンダードなら、私はその枠からはずれているような気がする。

「長嶺部長って、ビジネス推進事業部の部長さんですか？」

急に、後ろから声がかかる。秘書課の期待のホープ、と能城さんが嫌味たらしく言うていた林原さんが、そこには立っていた。

「あら、林原さん。あなた、長嶺部長に興味があるのかしら。でも駄目よ。あの方の仕事はぜえええええんぶ、この川嶋さんが受けるんだからっ。そのせいで、私たちはさっぱり長嶺部長に近づけないのよ」

泣き崩れるふりをして、能城さんが私の肩によりかかる。普段もこのくらいコミカルなら、もっと付き合いやすいになあ。まあ、いわゆる意地悪な先輩として、十分わかりやすいお姉さま方を見ていると、憎めない部分もたくさんある。

「そうなんですか。川嶋……さん？」

「はい、川嶋と申します。よろしくお願いいたします」

「お隣、いいですか？」

やわらかな笑顔に、私は思わずうっとりした。目立つ美人ではないけれど、爪の先まで品よく手入れされていて、とてもすてきな女性だ。

「どうぞ、お座りになってください」

「ありがとう」

これで同じ女性だなんて、ずるいなって思うくらい、林原さんはとても落ち着いて上品な人だった。大学院を出て、昨年長嶺商事に入社したと聞いている。天は二物を与えてしまったのね、と思わずため息をついてしまっそうだ。

そんな私の心のうちなんて知らずに、林原さんは私の隣に座った。右に能城さん、左に林原さん。私は秘書課のできそこないの気分。林原さんは、グラスを手にして私を見つめる。

「川嶋さんは、長嶺部長のご担当でいらっしゃるの？」

「はい、そうです。担当と言っても、もちろんほかの部署のお仕事もサポートに入らせていただいています。私もまだ配属されたばかりなので、いろいろと勉強させていただいている最中なんです」

「今年入社なんですネ」

まるで花がほころぶように微笑む彼女は、今まで出会った秘書課のほかのお姉さま方とは異なる、優しい雰囲気を感じていた。

「そうよ、今年入社していきなり長嶺部長の秘書だなんて、図々しい子なのよ」

能城さんは、だいぶお酒のまわったとろんとした目をして、私をびしっと指差した。

図々しいって、私いつでもそんなの代わりですよ！ 別に純希と一緒にいるために仕事をしているわけではな—いっ。

「能力がおりなんですか」

「あら、川嶋さんにあるのはアツチの能力なんじゃないの？ 人事部の部長さんにもとつても気に入られてるみたいだし、ねえ？」

「能城さん、酔ってらっしゃいますね」

実際、純希とは結婚しているわけで、つまりそういうコトもしているけれど、そんなの仕事には関係ない。職場でそういう行為をするわけでもあるまいし。でも、酔っ払いに反論しても無駄！ 私は気にせず、にっこり微笑む。そのとき、急に入り口あたりで歓声が聞こえた。振り返った能城さんが嬌声をあげる。

「長嶺部長が、どうしていらっしゃったの？」

私もその声につられて入り口を見る……と、純希と、もうひとり穏やかそうな笑みを

浮かべた男性が座敷に上がったところだった。

秘書課のお姉さま方に囲まれて、純希は終始にこやかに会話を楽しんでいるようだった。能城さんも早速そちらに行ったので、私はなごやかに林原さんと会話を楽しんでいる。心中、穏やかではないけれど、結婚を公表しないと決めたのは私なんだから、純希がほかの女性に言い寄られていても文句は言えない。ああ、でもね、そこまで愛想よくする必要はないんじゃないのかなっ。

「川嶋さんに林原さん、ご一緒してもいいかな？」

ビールのグラスを持った男性が、私たちの向かいの席に座る。いいかな、なんて聞いておいて返事の前に座るって、おかしくない？

「あら、神野さん、珍しいですね。こういう席に参加してるなんて」

「俺だって飲み会ぐらい参加しますよ、林原さん」

ジンノさん？ 私はその男性をじいっと見つめる。残念だけど私の記憶の中には、その人はいない。こんな印象的な顔立ちの男性ならば、以前に会っていたら覚えていそうなもの。

「はじめまして、川嶋さん。企画制作部副チーフの神野来都です」

その名前は、ラジオの人気パーソナリティと一文字違いだったので、私はちよつと驚

いてそれを尋ねた。

「あの、はじめまして。お名前が神野大都だいとにそっくりですね」

オネエ言葉で話す人気パーソナリティの彼は、元モデルで顔も整っていて、たまにテレビのバラエティなんかにも登場していた。目の前の神野さんは、そのラジオパーソナリティに、少し顔立ちが似ている……？ はっきりした二重の目に、意志の強そうな黒い瞳。少し茶色い髪と明るい笑顔。

「でしょう？ 俺もそれで困ってるんです。せめてもう少し名前が似てなければね」

「え？」

「神野大都の弟なんです、俺」

有名人の弟！ 私はびっくりして林原さんを見た。林原さんは知っていたのだろうか。「お兄様は有名みたいですよね。でも私、ラジオをほとんど聞かないので、あまり存じあげないの。本当にごめんなさい」

「お兄様だけじゃなく、俺のことも知っておいてほしいな、秋乃ちゃん」

「あら、もちろん神野さんのことも存じてますよ。JINプロの社長さんの三男坊ですものね」

「えええ!?」

JINプロダクションというのは、モデルや俳優、タレント、歌手を擁ようする大手の芸

能プロダクションだ。私だって、名前を知っているほどの大手プロダクションだよ？ その社長の息子が、同じ会社にいるなんて。しかも神野大都の弟ってことは、彼もJINプロの社長の息子なの!?

「そこまで知っていてくれてありがとう。川嶋さん、そんなにびっくりしないで。別に俺がJINプロの社長じゃないんだしさ」

「で、でもすごいですね。じゃあ、子どもどころから芸能人とか、生で見たいんですか？」
「思わず食いついてしまう、ミーハーな私。だって、芸能プロダクションって世界が違いますよ、ちょっと興味あるでしょ。」

「いや、俺は全然そういうのに興味なかったからね。兄貴どもと違って、芸能活動をしたこともないし」

とは言うものの、来都さんも十分に整った顔立ちをしている。目元や鼻が、神野大都に少し似ているし、かなり女性受けのよさそうな美形だ。

「それより秋乃ちゃん、秘書課に異動なんだってね。いやー、残念だったな。企画制作も秋乃ちゃん争奪戦に参加してただぜ」

去年入社したばかりのはずの林原さんが、争奪されている！ す、すごいなあ。確かに魅力的な女性だけれど、実力も兼備しているっていうことなのね……。でも秘書課に異動する前の海外対策事業部だって、超エリートばかりがいる部署だった。そんな実力

のある林原さんが、どうして秘書課に？

「父の意向で、あまり目立つ仕事は避けるよう言われてますので」

「うっわー、聞いた？ 川嶋さん、この人ね、こう見えて、ものすごい仕事の鬼なんだぜ。学歴もすごいんだよね」

「すごくないですよ」

「謙遜するなって。秋乃ちゃんって、日本で一番頭のいい大学の大学院で経済学修士とってるんだよ」

「け、経済学、修士……」

私立のお嬢様大学を出ただけの私とは、格が違いすぎる！ 日本で一番頭がいいっていうのは、もちろんあの大学のことですよね。逆立ちしても私なんて、入学できそうにない。でもそれほどの人が、秘書課なんかに来ていいのかな。もっと実力を発揮できる部署があるはずなのに、もったいない。お父様の意向とはいっても、本人の気持ちだつてあるはずだよな。

「海外対策事業部だって手放したくなかったはずだけどね」

「そんなことないですよ。私は裏方が向いているので、本当は総務に行きたかったんですもの」

「これだけの才女が総務？ そんなの、会社が認めるわけじゃないじゃんか」

来都さんは、笑いながらビールを飲み干した。それにしても、来都さんといいい林原さんといいい、すごい経歴や家庭環境の人たちだ。私みたいな普通の人間が、ここにいていいのだろうか！

「川嶋さん、ちよつといいいかな？」

その時、後ろから聞きなれた声があった。振り返る前から、それが誰なのかはわかっていた。

「はい、長嶺部長」

「今日の会議の件で確認したいことがあるので、飲み会の最中に悪いけど話せるかな」「はい」

私は林原さんに軽く会釈して、席を立つ。会議の件で確認なんて、絶対嘘だ！ だって、今日のビジネス推進事業部の会議内容なんて、私はまったく知らないんだもの。お茶を出したり、必要な書類をコピーしただけだよ？ 純希は私の返事に満足そうに歩いていく。

「あら、長嶺部長どちらに？」

「今日の会議のことで、急ぎ確認しなければならぬことがあります。申し訳ありませんが、川嶋さんをお借りしますね」

いつの間にか、純希は私のバッグとコートを手にはしている。もしかしてこのまま帰る

つもり……？

廊下に出て、ふすまを閉めると純希がざろりと私を睨んだ。

「社内では、一番女癖の悪い男と楽しそうに飲んでるなんて、どういうつもり？」

「ええ!？」

社内が一番、女癖が悪い……。それは、どう考えても林原さんのことではないので、来都さんを指しているのだとわかる。来都さんってそんな人だったの？ 私はびっくりして純希を凝視する。だって、全然そんなそぶりはない。明るくて、人当たりのいいお兄さんって感じだよ。

「とにかく帰るよ。早く靴履いて」

せっかく林原さんと話していたのに、純希の横暴っ！ わざわざ飲み会に顔を出してまで、私を監視することないのにな。

そして帰宅した私は、明け方近くまで純希にたっぷりとかわいがられてしまったのでした。かわいがらるっていうか、もうあそこまでいくと、ちよつとした嫌がらせだよ！ 妻の睡眠時間をもっと大事にしてください。

4 疑念と君の笑顔 〔純希〕

今日も空が青い。俺は執務室に入ると窓の外を見上げた。昨晚、遅くまでかわいい奥様と楽しんだせいで、今朝はいつもより遅い出社になった。美晴はいつもと変わらない時間に起きていたけれど、俺の顔を見ると頬をそめて目をそらした。それを思い出すと、笑みが浮かんでくる。

パソコンを起動したところで、ドアをノックする音がした。

「失礼します」

入ってきたのは、ビジネス推進事業部副部長である、嘉月宗佑かづきむねすけ——俺は、彼の苛立った表情を見たことがない。いつも穏やかで、人を安心させる空気を持つ男だ。彼の仕事ぶりは非常に堅実で、部下の指導も行き届いているため、俺はビジネス推進事業部の業務に関して、かなりの内容を嘉月にまかせている。

「嘉月さん、おはようございます」

「おはようございます。先週の海外対策事業部のインドプロジェクト終了に伴い、部長に至急確認していただきたい件があり、ご相談に伺いました」

嘉月の優れたところは、必要があれば自分が動くことだ。俺はそんな彼の上司であり、彼よりも年若い。しかし、俺が彼よりも実力があるということではない。そのことは、俺自身がよく知っている。経営者一族の次男。俺が入社したとき、どういう目で見られていたかは、わかっていた。だが、実力さえ示せば人はついてくる。所詮しょせんそんなものだ。

「インドプロジェクト、か」

そのプロジェクトは五年前から立ち上げられていたが、先方の企業との提携がどうしてもうまくいかず、滞りとどまを見せていた。しかし昨年入社した林原という女性が、プライベートのツテで、政府筋の大物の息子を介して、話をまとめあげたのだ。

「至急とは、どういう話ですか」

「表立った決算で見える限り問題はないのですが、帳簿を確認すると納得のいかない数字がいくつかあります。部長に確認していただけると助かります」

ビジネス推進事業部部長としての俺ではなく、長嶺グループ——長嶺総合商事株式会社の経営者一族である俺への、相談だ。

「わかりました、詳しく説明していただけますか？」

「はい、ではまずこちらの資料を目を通してください」

嘉月の説明によると、提携先のインド企業に提供した機器の領収書の金額が、価格調整されているようだった。

「承認印を押しているのは——村田常務、か」

人当たりがよく穏やかで、昔から父の片腕として働いてきている彼が、不正に手を染めているとは考えたくない。だが、価格に疑問の残る領収書のすべてが、最終的に村田常務の印を受けている。常務が印を押すのは、あくまでも最終確認であり、彼自身がその詳細を確認しているわけではないが——

「……至急、調査を頼めますか」

「かしこまりました。人員はどうしましょう」

「嘉月さんひとりで動いてください。情報が外部に漏れるのは防ぎましょう。それと、この時期の人事異動にも疑問を感じます。海外対策事業部から企画制作部へ異動になった園生氏、秘書課へ異動になった林原嬢、このふたりは、情報を握っている可能性もあります。あるいは、トカゲの尻尾切りということも」

「では、そのあたりに探りを入れてみます。どちらも個人的に付き合いがありますので」
嘉月の人脈には驚くべきものがある。ビジネス推進事業部の副部長をしていて、なぜ海外対策事業部にいた園生・林原両氏と個人的な付き合いが？ 疑問を感じないわけではなかったが、俺は領いた。この件に関しては、彼に動いてもらうほうが人目につかないだろう。俺が動くには、まだ早い。ビジネス推進事業部としての業務の傍ら、嘉月にそれを任せるのは負担になることもわかっている。その分の補佐は、俺がすればいい。

「嘉月さん、業務に差し支える可能性はありますか」

「当面、私は急ぎの仕事には関わっておりませんので、問題ないと思います。何か問題がありそうな場合は、部長にご相談させていただいてもよろしいですか？」

「もちろんです。業務と直接関わり合いのないことでお手間を取らせて申し訳ないです」

「いえ、私も長嶺総合商事の人間です。これは、大問題になる可能性もありますし、部長が気にされることはありません」

嘉月は、静かな微笑みを浮かべて一礼し、部屋を出ていった。

……待てよ、そもそも林原というのは昨日、美晴の隣に座っていた女性ではなかっただろうか。高い学歴と実力を持ちながら、旧家である林原家の家長の意向により、秘書課への異動を今回承認された——林原秋乃。美晴が面倒に巻きこまれないといいが、林原嬢の動向を確認する必要があるな。

俺は、内線で秘書課に連絡を入れる。

「ああ、ビジネス推進事業部の長嶺です。お疲れさまです。すみません、至急川嶋さんと林原さんにお手伝いいただきたい件がありまして、部長室まで来ていただけますか——」

数分後、彼女たちは俺の執務室へやってきた。美晴も呼んだのは、少しでも円満にこ

とを運びたいという気持ちのあらわれだった。俺の妻は、こう見えても人当たりがよく、仕事の経験は浅いが、円滑に業務を進めるためのサポートをすることができる。それに林原嬢と俺がふたりに執務室にこもっていたら、周囲が疑問に思う——特に、今回の不正事件の犯人たちがそのことを耳にしたら、何か感づく可能性もあった。

「急ぎ呼び立てて申し訳ありません」

「いえ、遅くなりまして」

ふたりは、にっこりと微笑み^{ほほえ}を浮かべる。秘書スマイルもうまくなったものだ、と思わず妻を見つめて、俺は咳払いをした。秘書としては新人のふた리를呼びつけるだなんて、秘書課の先輩連中にあとで文句を言われる可能性も考えられるな。今夜、美晴の機嫌が悪かった場合の対応も、考えておかなくてはならない。だが、まずは林原嬢の人間性を確認しておく必要があった。

「お願いしたいのは、先日のサイ・システム社のコンペ資料のまとめです。川嶋さんには、以前も同様の資料まとめをやっていたことがありましたね？」

「はい、やらせていただきました」

美晴は、落ち着いた声で丁寧^{ていねい}に答える。彼女は、まだ仕事を始めたばかりだが、育ちの良さや、生来の明るい性格が幸いして、秘書の業務に向いていると思う。

「今回は、海外向けシステム開発をメインにしています。つまり資料の六割が英語で書

かれたものです。林原さんは英語が堪能だと聞いていますので、ふたりに協力して、資料のまとめをお願いできますか？」

「はい」

「はい、かしこまりました」

美晴と林原嬢が、俺を見つめる。今回の資料のまとめはビジネス推進事業部の誰かに頼むことも可能だった。

「場所はこの部屋を使ってください。本件に関しては、極秘事項が資料内に多数ありますので、なるべくふたりとも外部との接触を避けるようにお願いします」

極秘事項とはいっても、資料にあるのはビジネス推進事業部所属の人間ならば、誰でも知っているような内容だった。外部との接触を禁止したのは、林原嬢がインドプロジェクトの不正問題と関係がある場合、ほかの人間と関わらない業務を担当してもらいたかったからだ。不正に関与していたとしても、彼女自身がそれに気づいていない可能性もある。そうなると、実に厄介だ。本人は業務を遂行^{すいこう}しただけのつもりなのに、結果として不正を働いた人間の手先になっていた——考えられないことではない。そして、そういう事実があったのならば、俺はその証拠を挙げて、彼女をも追及する必要がある。「何か不明な点があれば、私に確認してくださいね」

そう言った瞬間、林原嬢が微笑みを浮かべ、小さく頷^{うなづ}いた。ふたりが使うように、ノ

ートパソコンと資料を応接用テーブルに並べる。彼女たちは作業の流れを確認してから、資料を順番に並べ、手際よく仕事に取りかかった。

5 幸福という名のレストラン 〈美晴〉

肩より少し長い、やわらかそうなストレートの髪。爪はいつも丁寧のマニキュアが塗られていて、唇は品のいいピンク色——林原さんは、同性の私から見てもすてきな女性だと思ふ。取り繕った美しさではなく、内面からにじみ出る優しさと、彼女の丁寧なおしゃれとが相乗効果をもたらしている。年は三歳しか違わないけれど、私が三年後に林原さんみたになれるとは思えない。そうなりたいと思うけれど、きつとなれない自分を知っている。本質の問題なのよね、それって！ ああ、私も純希みたいな優雅さがほしいし、林原さんみたいな上品さがほしい！

今日も朝の打ち合わせが終わると、私と林原さんはビジネス推進事業部の部長執務室——つまり、純希の部屋へ移動し、資料のまとめをしていた。コンペに参加した企業は十二社。そのほとんどが、英語の資料を添付している。私はノートパソコンの表計算ソフトと、文書作成ソフトで、林原さんが仕分けした資料を順番に打ち込んでいった。

林原さんは、依頼された仕事を、丁寧にこなしていく。以前やったことがあるから、私も今回は一緒に任されたけれど、おそらく私がいなくても林原さんはひとりですら十分この作業をこなせる。頭がいいっていうのは、そういうことなんだなあと実感してしまった。

「そろそろお昼ですね」

十二時近くなったとき、それまで私たちに声をかけなかった純希が口を開いた。

「おふたりとも、お昼は外に出ませんか？ ごちそうしますよ」

突然の申し出に、私はちょっと目を見張る。いつもならば、ふたりでランチに行ったら必要にやっかみの目を向けられてしまうので、遠慮していた。けれど今日は林原さんもいる。三人で食事に行ったところで、あやしまれることもない。すごい、純希ってそういうところも計算してそうだ。

「わあ、光栄です。ね、川嶋さん」

やわらかな声に、私も微笑む。うーん、こんなふうに喜ぶことが、どうにも私はできない。必要以上に純希と距離をとると、逆に意識しているように見えるかもしれないし、どう対応すればいいんだろう？ 本当はもっと親しい間柄です。だけど会社では、結婚していることは秘密なんです。

「イタリアンでいいですか？」

純希はパソコンにロックをかけて、椅子から立ち上がった。こうして会社で見る純希は、本当に優しくて爽やかで、申し分のない御曹司サマ。その穏やかな笑顔は、多くの女性社員を虜にするんだろな。

純希の後ろについて、林原さんと歩き出す。エレベーターホールへ向かう途中、廊下の向こう側から見たことのある男性が歩いてきた。嘉月副部长——ビジネス推進事業部の副部长で、純希の腹心ともいえる男性だ。

「お疲れさまです。午後、先日の件で報告をさせていただけますか？」

嘉月さんは、純希に向かって小さな声で話しかける。先日の件が何のことかはわからない。そもそも私は純希の仕事の内容なんてほとんど知らない！ 彼は、おそらく私には想像もできないような業務をこなしているんだとは思う……

「ええ、大丈夫です。では、十五時に小会議室を押さえてもらっていいでしょうか」

「わかりました。空いてなかった場合は、連絡します」

「はい、お願いします」

なんだろう。ふたりとも穏やかに話しているのに、どこかしら緊迫しているように感じるなんて、おかしいな。

「嘉月さん、こんにちは」

林原さんが、軽く会釈する。私もそれにならって、頭を下げた。

「お疲れさまです。サイ・システム社のコンペ資料のまとめをしてくださっていると聞いています。何かわからないことがあれば、いつでも声をかけてくださいね」

穏やかで優しい雰囲気、嘉月さん。純希が社内でもっとも信頼していると、以前に言っていた。

「ありがとうございます。秘書課の業務もまだまだわからないことばかりで、至らない点もあるかと思いますが、どうぞよろしくご指導ください」

うーん、林原さんの返事を聞いていると、ものすごくオトナの対応って感じがする。秘書課のお姉さま方も、隙のない笑顔と言葉遣いには凄まじいものがあるけど、林原さんはもっと違う何か——隠しきれない品の良さみたいなものが、周囲に漂っているんだ。彼女の周りだけ、少し空気がキレイなんじゃないかと思うぐらい、林原さんは清廉な女性だ。

「今からお昼休みですか？」

「ええ、フェリチータへ行こうかと思っています。嘉月さんもどうですか？」

純希の誘いに、嘉月さんは肩をすくめた。

「申し訳ありません。まだ業務が残っておりますので。どうぞ楽しんでいらしてください」
その言葉に純希が軽く頷く。すると嘉月さんは微笑みを浮かべて、私たちの横を通りすぎた。そう思ったところで、急に——

「川嶋さん」

「はい」

急に嘉月さんに呼び止められて、私は彼を見上げる。

「これからもよろしくお願ひしますね」

「こちらこそ、どうぞよろしくお願ひいたします」

深々と頭を下げる。わざわざ呼び止めたのに、特に用事があるわけじゃないのかな。

「では、失礼いたします」

エレベーターホールでは、純希と林原さんが、静かに会話を交わしていた。お仕事スマイルの純希と、上品な林原さんは、なんだかすぐお似合いで、私は一瞬で気持ち沈むのを感じる。ああ、私も純希の隣に並んで、似合う女性だったなら！ こんなに、彼との結婚を秘密にすることもなかったかもしれない。

「川嶋さん、エレベーターきましたよ」

「はい」

私は会社では、ただの秘書でしかない。純希との幸せな時間は、マンションに帰ってからだもんっ。

連れていってもらったイタリアアンレストランは、フェリチータという名前で、イタリ

ア語で幸福という意味だと純希が教えてくれた。

「ラヴィオリがとても美味しいんですよ」

「それは楽しみですな」

女性客が多く、明るい日差しが入る、とても清潔感のあるレストラン。メニューを見ると、いくつも気になるお料理がある。私は悩んだ末、ジャガイモを詰めたラヴィオリのバジルソースを選んだ。それにお野菜のバーニャカウダ。林原さんは、岩中豚いわちゅうぶたと春キャベツの煮込みソースがけのキタツラと、山菜とメゴチのセモリナ粉フリットを注文していた。

「僕は、天然鮎とオクラとドライトマトのフェデリーニ、それに岩中豚とアーティチョークの煮込みを」

純希が注文するのを聞いて、『僕』!? と私は思わず笑いそうになる。仕事中は、自分のことを『私』というのは知っていたし、普段は俺様——じゃなくて、『俺』だよ。でも仕事の関係者と過ごす昼休みは、また違うんだ。きつと、私の知らない純希の顔が、まだまださんあるんだなあなんて、思わず感慨深い気持ちで彼の横顔を見つめる。

ところで、ラヴィオリがお勧めだと言っていたのに、頼んだのは私だけ？ なんだか複雑な気持ち！

お料理がテーブルに並ぶと、色とりどりで気持ちまで華やかな色合いになる。ラヴィ

オリ、本当においしい。私は思わず無口になって、食べることに集中していた。だって何を話せばいいのか、気後れしてしまうんだもの。そんな私をよそに、純希と林原さんは海外対策事業部の、前回のプロジェクトについて話し始めた。

「インドプロジェクトでは、本当にお疲れさまでした」

「私は、みなさんの足を引っ張るばかりでした」

「いえ、林原さんの助力が大きかったと聞いていますよ」

「恐縮です」

インドプロジェクト？ カレーでも作るのでしょうか。どうせ私はインドのことなんて、その程度しかわからないもんつ。

「川嶋さん、ラヴィオリはどうですか？」

急に林原さんが話題を変える。私は口にラヴィオリを入れたばかりだったので、あわててグラスの水で呑み込んだ。

「とってもおいしいです」

「私も今度は、ラヴィオリにします。カタッラもすごく新鮮な味ですよ」

林原さんの話し方は、優しく穏やかで、あたたかみがある。私は彼女と比べて、落ち着きがない。こういう大人の女性になりたいなあ。

「おいしそうに食べますね、おふたりとも」

純希にそう言われて、私はなんだか少しうつむいてしまった。

「女性の、群れていないと何も言えない雰囲気がとても苦手なんです。川嶋さんはおひとりでもきりつと立っていらしたから、一緒にお仕事できて嬉しいですよ」

食事を終えて、会社に戻る途中。林原さんが突然としか思えないタイミングで、そんなことを言い出したから、私はびっくりする。私が群れていないのは、秘書課のお姉さま方から気に入られていないだけだよ！

「そ、そんな、林原さんにそう思っていただけのほど、私はしっかりしてないです。ただ、あまりどなたとも親しくしていないだけで」

なんだか、言っていて情けない。誰とも親しくしていないのは、私の人間性の問題だと思われたらどうしよう。私の言葉を聞いて、前を歩いている純希がくすくと笑ったのがわかった。ねえ、ちよつと！ 私が秘書課で浮いているのは、純希のせいもあるんだからねつ。

「媚びて輪の中に入ろうとするより、ずっとすてきなことだと思いますよ。お話をしますますそう感じましたもの」

男性に口説かれている時よりも緊張するんじゃないかってくらい、林原さんを前にして私はドキドキしていた。残念ながら、男性に口説かれた経験も、皆無なだけどね……

しばらく談笑しながら歩いていくと、林原さんが急に周囲を見回して、いたずらっ子みたいな笑顔を浮かべた。

「社会人モード疲れちゃった。ねえ、よかつたら普通に話さない？ あんまり硬い口調って、仲良くなれる気がしないの」

「えっ、私もそのほうが嬉しいですよ！」

「よかつた！ 堅苦しいのって、実はすごく苦手なの」

林原さんの笑顔が、人懐こく、かわいらしい感じに変わる。声もそれまでとはトーンが違っていった。にこっと笑うその表情は、女性らしさはそのままに、プライベートなだけな感じで、額に入れて飾りたいほどだった。

「それにしてもビジネス推進事業部って、部署内で資料まとめをしないのね？ ちょっとびっくりしちゃった」

「え？」

私はいつも、ビジネス推進事業部の資料まとめや、議事録作成をしているので、それが普通なのだと思うていた。だって初めて就職したのが長嶺商事で、これが私の基本になっているんだもの。

「そうよ。海外対策事業部にいたころなんて、資料作成もまとめも、会議の議事録作成だって部署内で分担してやったもの。まあ、極秘資料が多かったから、そうするしか

なかったのもあるんだけどね」

知らなかった！ ビジネス推進事業部だけではなく、人事部の資料まとめもやっていたので、それがどの部署でも当たり前だと信じていたけれど、そうじゃない部署もあるんだ。同じ社内でも、いろいろな違いがあるのね。確かに極秘資料を扱うことはあっても、同じ社内なのだから、問題ないと思っていた。海外対策事業部だと、秘書課にさえ見せられないほどの極秘資料があるのかも！ 極秘資料という言葉に、なんとなくテレビドラマのミステリーみたいな響きを感じてしまう。

「でも、嬉しいんだけど」

「嬉しいって何が？」

「好きな人に会えるチャンスだから」

林原さんが、小首をかしげて微笑んだ。好きな、人——？

「やっぱり外は暑いですね」

社屋に入ると、純希が振り返った。エレベーターが下りてくる。

「そうですね。もう六月ですよ。今年は梅雨が早そうだと天気予報でも言っていましたわ」

「ふむ。梅雨の間は会社も休みになれば良いと、毎年思いますよ」

「長嶺部長でもそんなこと思われるんですか？」

「思いますよ。僕は普通の人間ですから、ね」